

## チェコスロヴァキアにおける社会主義期 (20世紀後半)の生活と文化: 住宅団地を事例に

森下 嘉之



### 目次

1. はじめに
2. 前史—社会主義体制の成立以前
3. チェコにおける社会主義の時代の始まり(1948-1968)
4. 「正常化体制」期の高層住宅団地(1969-1989)
5. おわりに—1989年の体制転換/「革命」とその後

#### 1. はじめに

かつて、日本で「高度経済成長期」と呼ばれていた1960年代以降、首都圏をはじめとして全国で都市化が進展した。この時代の都市化の象徴ともいえるのが、増大する人口のために建設された団地であった。東京西部の多摩ニュータウン、大阪の千里ニュータウンなどが、あげられよう。過密する都市部から離れた郊外に建設された団地群から、電車通勤によって職場に向かい、団地はやがて「マイホーム」となっていく。あくま

でも一面ではあるが、20世紀後半が「団地の時代」とも呼ばれる所以である。

所変わって、チェコ共和国(以下、チェコ)の首都プラハは、世界中から大勢の観光客が集まる街である。中世の街並みを残す中心部はユネスコの世界遺産に登録されており、古き良き街の美しさを求めて昼も夜も人波が絶えることがない(図1)。

しかし、プラハを走る地下鉄の終点付近まで足を延ばすと、眼前に広がる光景は、中世の美しい街並みとは全く異なるのである。ホームから地上に出ると、画一的な外見の高層団地に眼を奪われる(図2)。前述の日本のニュータウンを思い起こさせる、どこか既視感のある風景というのは言い過ぎだろうか。日本とチェコ、この二国で展開された団地建設は、後述するように、時期的にも、コンセプト的にも共通点を指摘することができる。

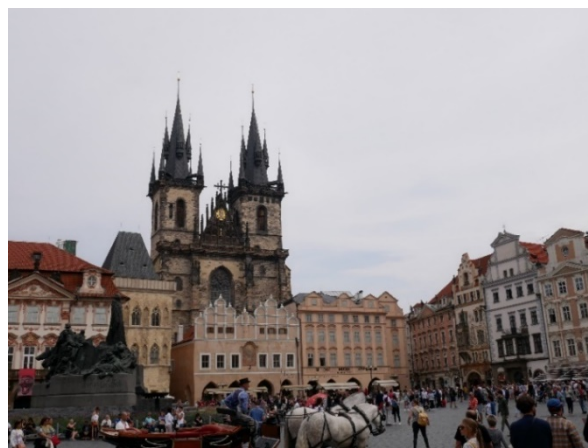


図1 観光客で賑わうプラハの街並み



図2 1970年代に建設されたプラハ郊外の高層団地

その一方で、チェコで建設された団地には、社会主義体制の影響が色濃く表れている。第二次世界大戦が終結した1945年の数年後から、1989年までの約40年間、世界では「東西冷戦」と呼ばれる時代があった。米国を中心とする西側・資本主義陣営(日本もその中に組み込まれた)と、ソヴィエト連邦(以下、ソ連)を中心とする東側・社会主義陣営に世界が二分されたと説明されることが多い。中

でも、ソ連に近接したヨーロッパの国々は「東欧」と称され、ソ連の実質的な影響下にあった。本章で紹介するチェコ(当時はチェコスロヴァキア)も、その一つである。

東欧諸国における社会主義体制は、1989年の体制転換、いわゆる「東欧革命」を契機に姿を消した。社会主義体制については、ここではひとまず、共産党による一党独裁政権という意味合いで用いよう。ヨーロッパにおける東西冷戦の約40年間、国によって

差はあるが、概して東欧諸国では人の移動は制限され、厳しい言論統制が敷かれていた。加えて、東欧諸国と西側との経済格差が広がり、生活水準の落差も目に見えるものとなっていた。チェコにおける住宅団地は、まさにこの社会主義の時代に建設されたものなのである。

外国人観光客で埋め尽くされ、どこかテーマパークと化した感のある市中心部の街並みに対して、これらの団地は、チェコの人々が今を生きる、現実の生活世界でもある。本章は、街を取り囲む高層団地群を軸足に、チェコの世界主義の歴史を振り返ってみたい。日本とチェコで一見よく似ている団地の光景、その中にも、歴史的経験から培われた「多様性」を読み解くことができるのか、これから見ていこう。

## 2. 前史—社会主義体制の成立以前

社会主義の歴史に向かう前に、まずはチェコスロヴァキアという国の成り立ちを見ていこう。チェコスロヴァキアという国名が地図上に現れるのは、今からおよそ百年前の1918年、第一次世界大戦の終結時であった。独立の指導者トマーシュ・ガリグ・マサリク(Tomáš Garrigue Masaryk 1850-1937)は、この地に民主主義の共和国を実現すべく、米国の支持を取り付けることに成功した。

新国家の首都となったプラハの住宅開発のポリシーを最もよく表している場所が、1920年代末に同市南部に建設された、「スポジロフSpořilov」という地区である。庭付き戸建ての家々が立ち並ぶ、一見何の変哲もない住宅地である(図3)。これは、20世紀初頭のイギリスに端を発し、当時ヨーロッパ中に広まりつつあった「ガーデン・シティ」の構想に基づくものであった。「ガーデン・シティ」とは、簡単に言えば、過密化が進む都市の中心部を避けて、緑豊かな郊外にマイホームを共同出資によってつくるという発想である。そこで重視されたのは、個人が勝手気ままに建設するのではなく、都市計画に沿った秩序ある宅地開発を行うことであった。日本でも同じ時期に、渋沢栄一を中心として、東京西部に「田園都市」という名のもと、住宅地開発が進められた。



図3 1920年代プラハの「田園都市」

ただし、こうした「ガーデン・シティ」に住むこ

とができた層はごく一握りであった。ローン支払いのために無駄遣いをせず、定期的な収入を「貯蓄」に回すというライフスタイルを持った者のみが、「夢のマイホーム」の購入を認められたのである。これは換言すれば、19世紀に進展した資本主義に適合した生き方であった。人に頼らず自分で稼いだうえで、将来を考えて浪費を行わない、「自立した市民」の規範を身につけることが求められたのである。

プラハの「スポジロフ」もまた、単なる個人住宅ではなく、住宅組合の出資者によって資金が賄われていた。「スポジロフ」という名称は、「貯蓄するspořit」という語に由来するが、この名前に、当時の価値観が色濃く反映されていることは言うまでもない。新国家の首都に忽然と現れた、「自立した市民」のための住宅地には、新時代の理念が反映されていたのである。

マサリクが目指した民主主義の共和国は、ヒトラー率いるナチ政権によるチェコスロヴァキアの領土割譲を定めた、1938年の「ミュンヘン協定」によって事実上の終わりを迎えた。翌1939年、ヒトラーは軍をチェコに進め、同国を「保護領」として支配下に置いた。スロヴァキアはナチによって独立を保障されたが、実態はドイツの傀儡国であり、チェコスロヴァキアはわずか20余年で地図上から消滅した。

### 3. チェコスロヴァキアにおける社会主義の時代の始まり（1948-1968）

第二次世界大戦を経てナチ・ドイツが敗北した1945年、チェコスロヴァキアは再度独立を回復した。しかし、戦後直後から米ソ間の緊張が高まる中、1948年には共産党による支配体制が同国において確立された。以降、1989年まで約40年にわたる、共産党の一党独裁政権の時代となる。



図4 1950年代「社会主義リアリズム」様式の住宅団地

共産党政権は成立直後から、戦後復興と重工業化を進めるための計画経済を開始した。中でもチェコ東部の工業都市では、重厚な4-5階建ての住宅団地が1950年代に相次いで建設された(図4)。これらは、住宅のみならず、社会主義体制にはつきもの



のパレード行進にも利用できるような幅広の直線道路をも含む、本格的な都市計画に基づくものであった。建物の外見には、社会主義のシンボルである労働者の像が飾られていた。1950年代に多く建設されたこのような建築様式は一般に、社会主義リアリズムと呼ばれた。

共産党政権の成立によって、1950年代に入ると農村や企業経営の大規模な集団化が進められた。そこで導入されたのは、社会主義という目標を実現するための労働、規律、集団という価値観であった。「田園都市」で見たような、「自立的な市民」のための戸建て住宅は、社会主義にそぐわない「個人主義」「ブルジョワ的」遺物とみなされた。

集合住宅を基盤とする大規模都市計画は、社会主義体制下において、国家プロジェクトとして構想された。当時、気鋭の建築家であった黒川紀章は、チェコの都市計画について早くも1959年に日本に紹介していた。そこで指摘されたのは、「都市の将来のモニュメント」を創るというコンセプトであった。他方、日本のモダニズム建築もまた、同時代のチェコで着目されていた<sup>1</sup>。

もっとも、政権が集中的な都市化・工業化を進める中で、1960年代以降は量的にはむしろ住宅不足が深刻化していった。チェコの経済は次第に停滞を見せ始め、西側諸国との差は目に見えるものとなっていた。共産党政権は体制を維持するために、厳しい言論・情報統制を敷いていたが、これらは国民にとって大きな不満の種となっていた。

そのような中、1968年1月に共産党第一書記に就任したのが、アレクサンデル・ドゥプチェク(Alexander Dubček 1921-1992)であった。彼を中心とする共産党指導部は、出版物の検閲廃止や市場経済の一部導入を打ち出した。このような方針は、「人間の顔をした社会主義」とも呼ばれた。また、毎年5月にプラハで開催される音楽祭の名称から、「プラハの春」という名で知られることになった。

この「プラハの春」に危機感を抱いたソ連は1968年8月、同国主導の軍事同盟「ワルシャワ条約機構軍」を動員してチェコを占領した、ドゥプチェクら共産党の改革派は政権を追われ、「プラハの春」は挫折した。彼らに代わって同国のトップに立ったのが、グスターウ・フサーク(Gustáv Husák 1913-1991)という人物であった。彼が権力を保持した、1989年の共産党政権崩壊の直前までの20年間は、「プラハの春」が社会主義からの「逸脱」であったという意味で、「正常化」の時代(以下、「正常化体制」と呼ばれている。

<sup>1</sup> 黒川紀章「チェコスロバキアの都市計画」『国際建築』26巻7号、1959年、67-70頁。

言論の自由が抑圧された社会体制が、団地での生活にどのような作用を及ぼしたのか、以下で見えていこう。

#### 4. 「正常化体制」期の高層住宅団地（1969-1989）

1970-80年代の「正常化体制」期は、将来の人口増を見越して、全国各地で大規模な高層団地が建設された時代でもあった。中でも、プラハの団地「イジュニームニェスト（南町）」は、8万人が居住するチェコ最大の団地として、この時期に着工された（図5）。1960年代は全国で25万戸程度であった住宅建設数が、1970年代には40万戸を超えており、この時期に増大していたことが伺えよう。



図5 プラハ「南町」の高層団地

建築様式も大きく変化した。1950年代に見られたような重厚な社会主義リアリズム建築に代わって、徹底した規格化・合理化が目指されたのである。8階建て以上の高層化が進展し、外見もほぼモノトーンであった。最終的に、社会主義期に建設された高層団地は約8万棟116万戸、入居者は400万人に達した。この数は、現在のチェコ共和国側の住民数の約3分の1を占めるものであった。パネル工法で大量生産されたことから「パネラーク」という、やや皮肉を込めた呼び方も、チェコの人々の間に膾炙することになる。

これらの高層団地で設計されたのが、若年夫婦と子どもを対象にした、キッチン付き3部屋というものであった（図6）<sup>2</sup>。子持ち家族で3部屋（おおよそ70㎡）というのは、少々手狭と感じられるかもしれない。実際、1970年代

建築様式も大きく変化した。1950年代に見られたような重厚な社会主義リアリズム建築に代わって、徹底した規格化・合理化が目指されたのである。8階建て以上の高層化が進展し、外見もほぼモノトーンであった。最終的に、社会主義期に建設された高層団地

は約8万棟116万

戸、入居者は400万人に達した。この数は、現在のチェコ

共和国側の住民数の約3分の1を占めるものであった。パ

ネル工法で大量生産されたことから「パネラーク」という、

やや皮肉を込めた呼び方も、チェコの人々の間に膾炙する

ことになる。

これらの高層団地で設計されたのが、若年夫婦と子ども

を対象にした、キッチン付き3部屋というものであった（図

6）<sup>2</sup>。子持ち家族で3部屋（おおよそ70㎡）というのは、

少々手狭と感じられるかもしれない。実際、1970年代

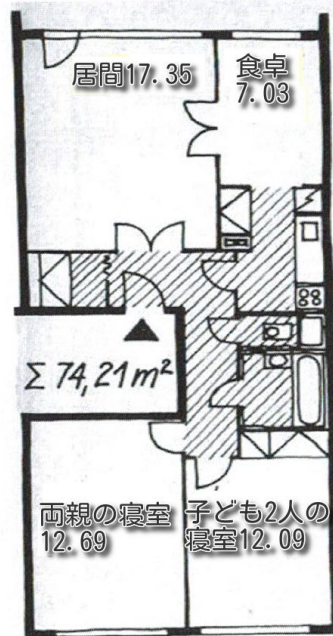


図6 「フサークの3部屋住宅」の間取り

<sup>2</sup> Lada Hubatová-Vacková, Cyril Říha (ed.), *Husákovo 3 + 1: bytová kultura 70. let*, Praha, 2007, p.110より筆者作成

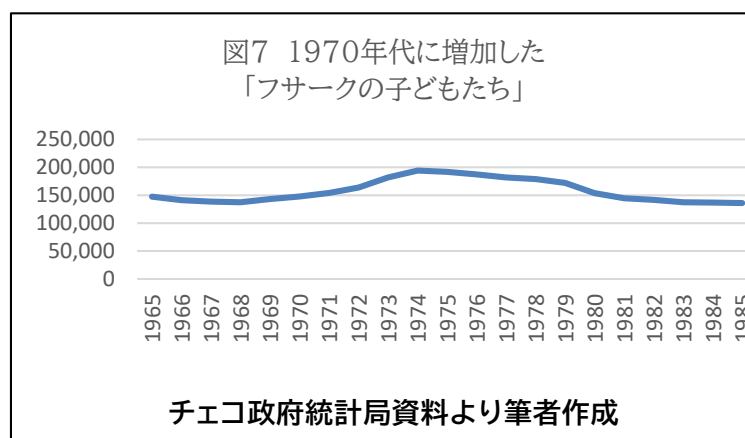
に生まれた世代の多くは、成人した後に団地を離れていったことから、質より量を優先した点は否めない。

その一方で、この時期に建設された住宅団地群が、それまでの居住環境をかなり改善した点は見逃せない。イジー・メンツェル(Jiří Menzel 1938-2020)監督のチェコ映画「スイート・スイート・ビレッジ」(1985年)には、キッチンと上下水道が完備された団地の設備に主人公が驚くシーンが描かれており、当時のチェコの人々が団地に対して持つ印象を表現している。

さらに重要なのは、当時の団地建設政策が、共産党政権が推進する社会福祉の柱をなしていた点である。1968年「プラハの春」の挫折とその後の共産党政権による締め付けは、同党に対する国民の支持を失わせる恐れがあった。政権側は、国民への求心力低下を防ぐために、様々な社会福祉を充実させる必要に迫られたのである。

その一つが、1969年から1972年にかけて導入された、二人以上の子どもがいる家族を対象とする児童手当であった。結果的に、千人あたりの婚姻率は、1960年の7.7から1970年には9.2へ、出産率は1969年の13.3から1970年には15.1へと上昇した<sup>3</sup>。これらの施策は元来、同国の経済成長と少子化の進行という未来に備えて、既に1968年「プラハの春」以前から計画されていた。また、政策の意図としては「仕事」か「育児」かの選択を迫られてきた女性に対する経済的支援という側面を有していた。結果的には、団地建設の増大と相まって、1970年代には大幅な出産増がみられたのである(図7)<sup>4</sup>。この時期に生まれた世代につけられた呼び方は、時の為政者の名をとった「フサークの子どもたち」という、あまり有難くない(?)ものであった。

1970-80年代における大量の住宅建設は、住宅に付随した様々な文化を生み出した。まず挙げられるのが、住宅の内装、



<sup>3</sup> Jakub Rákosník (ed.), *Sociální stát v Československu: právně-institucionální vývoj v letech 1918-1992*, Praha, 2012, p.175.

<sup>4</sup> [https://www.czso.cz/csu/czso/obyvatelstvo\\_hu](https://www.czso.cz/csu/czso/obyvatelstvo_hu) (最終閲覧：2020年6月20日)

とりわけ家具や食器といった消費財の普及である。チェコでは昔からガラス製造の伝統があったが、この時期に大量生産に伴うデザインの画一化が進んだ。当時製造されたガラスのコップやジョッキなどは、独特の武骨な見た目と重さが特徴的である。これらの食器類は、社会主義期を思い起こさせるモノとして、現在も人々の記憶に刻まれている。

住宅建設は、ベッドやソファなどの家具に加え、テレビや洗濯機などの家電製品の普及を促した。娯楽が制限された当時のチェコ社会にあって、テレビは生活必需品としての地位を確立していった。実際、1970年代から80年代にかけて、チェコでは数々の国民的ドラマや映画が作成された。これらのストーリーの中には、共産党の意向を踏まえた、社会主義のために働く女性を主題にしたものや、西側のコンテンツを露骨に模倣したものも見られた。

高層団地の建設と並んで、「正常化体制」期に増加したのが、チェコ語でハタ(chata)と呼ばれる別荘であった。住宅の個人所有は共産党政権時にも認められており、1965年には全国に10万軒強であった別荘の数は、1971年には15万軒、1980年には22万軒と大幅に増加した。ブームの理由としては、都市部の高層団地の住民が自然を求めるようになったこと、自動車が市民に普及したことなどがあげられる。別荘で過ごすために人々の間で定着したのが、日曜大工・「モノづくり」であった。芝刈り機や車のバッテリー、電気ポット、溶接機に至るまで、社会主義を生きる人々は別荘の生活の中で自作していたのである<sup>5</sup>。緑に囲まれた別荘でのひとときは、「正常化体制」の窮屈な空気を忘れさせてくれる貴重な場であった。都会の高層団地と田舎の「ハタ」、この二つは社会主義期の多様な経験を今に伝える、車の両輪と言えよう。

## 5. おわりに—1989年の体制転換/「革命」とその後

1989年11月17日、プラハの一角で生じたデモ行進が、約40年続いた共産党の一党独裁体制に終わりをもたらす契機となった。チェコでは流血の惨事を伴わなかったことから、「ビロード革命」とも呼ばれた。この大転換の主役となったのが、反体制運動を続けていた劇作家のヴァーツラフ・ハヴェル(Václav Havel 1936-2011)であった。ハヴェルはサクセスストーリーを地で行くように、「革命」を経てチェコスロヴァキア大統領に就任

<sup>5</sup> Petra Schindler-Wisten, *O chalupách a lidech: chalupářství v českých zemích v období tzv. normalizace a transformace*, Praha, 2017, pp.152, 187.



した。

「革命」後の1990年代は、ハヴェルの意図を超えて、急激な社会変化が生じた時期であった。「民主化」の成功が喧伝された一方で、市場経済化・民営化は急ピッチで進められた。社会主義期以来の集合住宅は建設を打ち切られ、住宅市場は民間に委ねられた。1993年にはチェコとスロヴァキアの連邦制(1969年施行)は解消され、「チェコ共和国」が誕生した。1999年には、米欧を中心とする軍事同盟「北大西洋条約機構(NATO)」に加盟した。さらに2004年には、ヨーロッパ連合(EU)への加盟を果たした。2008年には欧州域内での事実上の国境撤廃を掲げた「シェンゲン協定」への参加も認められた。

その一方で、「革命」後の新政権は、旧共産党政権の関係者の排除を推し進めた<sup>6</sup>。しかし、社会主義の時代の否定は、チェコの人びとにジレンマをもたらした。彼ら・彼女らにとって、自分たちが幼少期から身を置いてきた高層団地群や別荘での多様な生活もまた、否定すべき対象となるのだろうか。

そのような問いかけに対して、一つの手がかりを与えてくれるのが、2007年に刊行された『フサークの3部屋住宅』という本である。第3節で見た、1970-80年代に建設された高層住宅の生活を、「フサークの子どもたち」世代が自ら振り返る内容である。そこでは、当時のインテリアや食事風景などの写真が、ノスタルジー風に掲載されている。社会主義の時代を全否定するような主張は、そこには見られない。

団地生活におけるテレビ文化の重要性について前述したが、この時期に制作されたドラマ・映画は、21世紀の現在においても、しばしばゴールデンタイムに放送されている。チェコにおいても日本と同様、「若者のテレビ離れ」が進んでいるといわれており、テレビは今や、社会主義期を過ごした「フサークの子どもたち」の親世代向けコンテンツを重視する方向にあるという。団地という風景は、入居者の実数以上に、広範な国民に対して、社会主義の記憶を継承する装置として機能しているともいえる。「フサークの子どもたち」という呼び名が広く定着している現状、チェコの人びとにとって「社会主義/正常化体制」の多様な記憶は、今後も暫くは刻み続けられるのかもしれない。

(本章の写真は、いずれも筆者が撮影したものである。)

<sup>6</sup> 東欧諸国における社会主義の歴史経験については、第8章を参照。

## 参考文献

- 黒川紀章(1959).「チェコスロバキアの都市計画」『国際建築』26巻7号、67-70.
- 田中由乃、神吉紀世子(2015).「プラハ市において社会主義時代に形成された住宅開発地の再価値化に関する研究－プラハ11区イジュニームニェストを事例として」『日本建築学会計画系論文集』80(709)、631-640.
- 原武史、重松清(2010).『団地の時代』新潮選書.
- 福田宏(2016).「ロック音楽と市民社会、テレビドラマと民主化－社会主義時代のチェコスロバキア」村上勇介、帯谷知可編『融解と再創造の世界秩序』青弓社、137-160.
- Lada Hubatová-Vacková, Cyril Říha (ed.), *Husákovo 3 + 1: bytová kultura 70. let*, Praha, 2007.
- Jakub Rákosník (ed.), *Sociální stát v Československu: právně-institucionální vývoj v letech 1918-1992*, Praha, 2012.
- Petra Schindler-Wisten, *O chalupách a lidech: chalupářství v českých zemích v období tzv. normalizace a transformace*, Praha, 2017.
- Kimberly Elman Zarecor, *Manufacturing a socialist modernity: housing in Czechoslovakia, 1945-1960*, University of Pittsburgh Press, 2011.

## もっと知りたい人のためのブックリスト

- ・ヴァーツラフ・ハヴェル(阿部賢一訳)(2019).『力なき者たちの力』人文書院.
- ・薩摩秀登(2006).『物語チェコの歴史－森と高原と古城の国』中央公論社.
- ・薩摩秀登編著(2009).『チェコとスロヴァキアを知るための56章』明石書店.
- ・四方田雅史、加藤裕治編(2018).『中東欧の文化遺産への招待－ポーランド・チェコ・旧東ドイツを歩く』青弓社.